

コロナ禍が学校教育や子どもに及ぼす影響と対応 策の考察

—もしもう一度突然未知のウイルスが蔓延したら—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
206034 濱田 祥希

コロナ禍における学校教育や子どもへの影響 —もしもう一度突然未知のウイルスがやってきたら—

濱田祥希

生徒指導力高度化コース

要約：2019年12月初旬世界的に新型コロナウイルスが蔓延し、学校教育に休校処置やGIGAスクール構想を前倒しにするなど多大な影響を与えた。休校期間中、学校としては学習に遅れが生じないように課題を作成し、子どもに取り組ませた。しかし、学習の中身や課題についての質問ができないことや、友達との関わりがなくなるなどの困りを抱えた。また、学校再開後はコロナ禍のため、感染症の不安や、行事がなくなったことに不満を持ち、現在も学校生活を送っている。まだ収束はしていないが、もし同じような未知のウイルスが蔓延してしまった場合や、これからの学校側の対応としてはどうするとよいのかを、子どもたちの声を実際に聞き、その結果からGIGAを用いた家庭での学習をしなければならないことや、友達との関わりについてもGIGAを用いるとつながりを持てることを明らかにしている。さらに、そのためには今からでもそのための準備をしなければならないことを提唱した。

キーワード：コロナ禍、休校期間、学校生活、学校再開後、GIGAスクール構想

1. はじめに

京都教育大学大学院連合教職実践研究科に入学した年(2020)は、コロナ禍であったため、我々だけでなく全国の学校がしばらく休校期間となり、自宅待機を余儀なくされた。大学生は自分の時間を自由に使うことができ、自分の趣味を突き詰められたが、自分の時間を好き勝手に使うといったことは、小学校児童にとっては難しいように感じる。では、児童たちはコロナ禍の学校閉鎖期間はこういった思いをもって過ごしていたのか。

その後、6月に全国の学校は時差登校などの対応をしながら授業再開することができた。大学はオンライン授業での再開となった。そんな状況の中で我々のような大学生が対象であれば、ICT教材を用いた授業であっても適応はしやすいと感じた。しかし、小学校や中学校、高校であればGIGAスクール構想が前倒しになり、注目はされていたが、積極的には用いてこられなかったICT教材を用いて授業をしないといけない状況になった。そのことから教材研究が不足

していると予測されるが、子どもたちはタブレットを用いて学習することについてどのように感じているのか。といったことを疑問に感じた。

学習面以外ではマスクを着用する。給食は黙食、行事は中止や代替行事になる。このようなたくさんの変化が、子どもたちに与えた不安やストレスにはどのようなものがあるのか。それが、学校生活にどのような影響を与えているのか疑問に感じ、この先同じような状況になった際に学校側はどのようなことを配慮すればよいのかを考察したく本研究を行う。

2. 研究の背景

今現在も世界中に影響を与え続けている新型コロナウイルスであるが始まりは2019年12月初旬の事であった。発生してから瞬く間に日本だけでなく世界中に広がっていった。令和2年3月2日には全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校について春休み前まで臨時休業要請が出された。休校期間は4月上旬から4月16日に発令された緊急事態宣言による休校措置までの少しの期間を除いて5月末までほとんどの学校が休校措置をとっていた。休校期間中子どもたちは新年度が始まりはしたものの、学校には行けず学習はプリントの課題に取り組むことが基本になった。しかし、誰もがこのような世の中になるとは予測しておらずその課題の中にも不備が多くみられた。数少ない学習手段である課題に不備があることが分かったとしても、子どもたちは誰に相談をすればいいのかわからない状況下であり、ストレスを感じていたのではないだろうか。また、このような学校に通えない状況がいつまで続くのか。友達とはいつになったら話したり遊んだりすることができるのかといった、不安を抱えながら過ごしていたのではないかと考える。

今後またもや同じような状況になったとすると子どもたちは今回の休校期間と同様に家庭での学習を余儀なくされてしまう。学習に関しては、児童がタブレットを用いてオンラインでの課題や授業を行うことになることが予測されるが、タブレットを用いた学習はインターネット回線を使用しなければならない。では、子どもたちはいつでも、家庭内でインターネット回線をいつでも使用することができる状況にあるのか。

また、生活面では自宅待機をしなければならない中で、友達や教員との関わりといった人間関係はどのようになっていたのか。家庭内で学習しなければならない場合のモチベーションや友達と話をすることや遊べないことに関するストレスはどうであったのか、といったことを把握しておかなければならない。

3. 先行研究

3-1 大学生のネット環境

「コロナ禍における大学生のオンライン学習状況に関する調査報告(速報)」(木村ら, 2021)では九州大学と北京大学の学生を対象にネット環境への質問が成されていた。表1のような結果になっており大学生の家庭ではネット環境が充実しているといった結果になった。

表1 大学生のオンライン授業期間中のネット環境

オンライン授業期間中の御宅のネット状況について教えてください。		
選択肢	九州大学	北京大学
	回答者数(%)	回答者数(%)
1.安定している	74(93%)	92(84%)
2.頻繁に途切れる	6(8%)	14(13%)
3.ネット環境がない	0(0%)	3(3%)
合計	80(100%)	109(100%)

3-2 高校生の休校期間と学校再開後の感情の変化

「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に伴う休校期間が高校生の感情に及ぼす影響の一考察-生徒の分析を通して-」(丹内ら, 2021)では, 休校期間が高校生の感情に及ぼす影響の考察としてコロナ禍の休校期間の延長を決定した週(2020年4月6日~5月18日)までの7週間および, 学校再開後, 約半年の期間を開け10月17日~30日の2週間を調査期間とし, 様々な感情についての調査を行った。

結論としては悲しみや恐れ, 怒りの感情といったネガティブ感情は学校再開するとともに減少傾向がみられ, 喜びや好きといったポジティブ感情は増加傾向にあった。実際の生徒のコメントとしては「学校が一度長期休校になり再開したことで学校の楽しさに改めて気づいた」, 「友達に会うことで様々な感情を抱くことが充実している気がする」といったポジティブなコメントが多かった。一方で「休校中はストレスがたまらなかったが, 今は溜まってきている」といったネガティブなコメントもあった。

この研究から高校生では学校再開による友人関係や学校生活がポジティブな感情を高める可能性が示唆された。もちろんその逆であるネガティブな感情が高まる生徒もいることが分かった。

3-3 小中学生の休校期間と学校再開後の生活についてのアンケート調査

小中学生の児童生徒については, 一般財団法人教育調査研究所が令和3年1月に実施した,

コロナ禍が与えた影響について検討する。また、今後の学級経営の充実に向けての知見を得るための質問紙調査では、臨時休業中の生活習慣や学習に対する意識に関する質問や、学校再開後の体の調子、学校生活の意欲についての質問がされていた。

対象学校は東京都内の公立学校で小学校は52校の第五学年児1720名、中学校は51校の第二学年生徒1607名としている。質問内容と結果については本研究の内容と関わる部分を抜粋したうえで次の表2,3のようにになっている。

表2 臨時休業中の状況(%)

①学校に通っているときと同じ時刻に寝たり起きたりすること					
	よくできた	どちらかといえばできた	あまりできなかった	全くできなかった	無回答
小学校	23	31.2	32.3	12.3	0.3
中学校	18	27.1	37.5	17.3	0.1
②決められた時間に(あるいは計画を立てた時間)、学習すること					
小学校	32.9	39	22.7	4.9	0.1
中学校	15.1	35.5	38.3	11.1	0.1
③友達と話をすること(直接会って・電話やLINE(ライン)、メールなど)					
小学校	31.7	22.2	22.3	23.4	0.1
中学校	48.4	24.6	16.7	10.1	0.1
④新型コロナウイルスに対する気持ち					
	とても不安	どちらかといえば不安	あまり不安ではない	全く不安ではない	無回答
小学校	40	36.2	17.8	5.1	0.5
中学校	28.6	43.2	22.2	5.2	0.8

こうした結果から、臨時休業中は登校することがなく、教師や友達と一緒にでないため、学習への動機づけが高められる環境にないことが分かった。そのため、学校がある日と同じ時刻に起きたり、寝たりすることができず、生活リズムがおかしくなってしまった子どもが多くみられた。学習に関しても、学校のように時間が決まっておらず、自分で好きな時に好きなだけ学習するといったスタイルになっていたことから、なかなか学習へ向き合うことができなかったのではないかと考えられる子どもが多い。休校期

表3 学校再開後の状況(%)

①友達のことを考えた思いやりのある接し方をして仲良くすること					
	よくできた	どちらかといえばできた	あまりできなかった	全くできなかった	無回答
小学校	54.7	36.7	6.9	1.3	0.5
中学校	56.9	37.6	4.4	0.4	0.8
②体の調子					
	とてもよかった	どちらかといえばよかった	あまりよくなかった	全くよくなかった	無回答
小学校	32.9	39	22.7	4.9	0.1
中学校	15.1	35.5	38.3	11.1	0.1
③新型コロナウイルスに対する気持ち					
	とても不安	どちらかといえば不安	あまり不安ではない	全く不安ではない	無回答
小学校	43.3	36.5	14.7	5.1	0.5
中学校	32.7	42.6	19.4	4.6	0.8

間中に友達とのかかわりを持てた子どもたちは、小学校は少ないが中学校になるとかなり増えているが、これは中学生になるとインターネットを使うことができる子どもが増えているのではないかと予想できる。

4. 目的

①本研究では小学生を対象に研究するため、児童の家庭ではどのくらいネット環境が整っており子どもたちがインターネットを自由に使うことができるのかを調査する。しかし、保護者が使えるだけでなく子ども自身が使える環境であるのかを調査する。そしてこの先、同じような状況に陥った場合オンライン授業が可能であるかを考察する。

②休校期間中は友達との関わりを持つのが難しかったが、それが子どもたちにとってどのような影響を与えたのか。また、学校再開したが、コロナ対策による行事や給食の食べ方などの変更が、子どもたちはどのように捉えているのか。また、ほかにはどのような要因があるのかを調査する。

③体の調子については学校が再開してよかったと回答している児童生徒が半数以上いることが3-3にて分かったが、その要因が何かはわからなかったため、小学校では五年生だけでなく休校を経験している二年生から六年生のすべての子どもたちに今現在、学校に来ることに関してどう感じていて、その動機はなにかを調査し明らかにする。

①, ②, ③を通して、またこの先に今回のような未知の感染症が蔓延したときにどのような対応をすると子どもたちにとってよりよい影響を与えられるのかを考察し、学校としてどのような対応をすべきなのかを提唱することを目的とする。

5. 研究方法

5-1 アンケート調査と分析

本研究では、京都市にある小学校A校、B校の2年生から6年生までの623名を対象にアンケート調査を行った。質問項目は各学校で少し変更を加えている。まず両校ともに共通している質問項目として「Ⅰタブレットで学習するのは楽しい」「Ⅱおうちでインターネットを使うことができる」「Ⅲコロナウイルスの中での学校生活に不安や不満がある」「Ⅳ学校生活は楽しいですか」である。これらは二者択一で回答してもらう。「Ⅱおうちでインターネットを使うことができる」については、A校はアンケートで子どもからとり、B校は学校側がすでに保護者から各家庭の状況を把握したデータを保管してくださっていたため、そのデータを参考にさせていただき、データを集計した。学校生活に不安や不満がある場合や、学校生活が楽しくても楽しくなくてもその理由を記述してもらった。また、「Ⅴコロナウイルスの中で運動会がなくなったり給食で喋ったりしてはいけないことをどう思いますか」「Ⅵコロナウイルスが収まったら何をしたいか」はA校B校共に、記述式で回答する。B校だけではあるが「Ⅶ去年の休学中に困ったことやよかったこと」についても記述式で質問した。

分析法としては二者択一の質問に関しては割合をだしグラフ化する。記述式に関しては似たような回答をまとめてカテゴリー化し割合をグラフ化する。

5-2 インタビュー調査

インタビュー調査では、アンケート調査と同じ学校同じ各学年 20 名ずつ合計 100 名を対象にアンケート調査だけでは不透明であったことについて深めるために行った。質問は授業後など休み時間に個別に行った。主な質問としては「Ⅰ ZOOM を用いた朝礼についてどう感じるか」「Ⅱ ロイロノートを用いて回答をみんなで共有することをどう思うか」「Ⅲ 休校中と今でうちでの過ごし方」を質問した。

この調査では子どもたちがインターネットでの学校行事や今年から始まった教育方法についての思いを分析する。

6. 結果

2 択の質問に関する結果は図のようになった。

図で示しているのはアンケートを実施した 2 校の第二学年から第五学年の 623 名の児童のアンケートをもとに割合で表している。(図 5, 6 のみ有効回答が 5 名少ない 618 名の回答となっている。)

6-1 タブレットで学習するのは楽しい。おうちでインターネットを使うことができる。

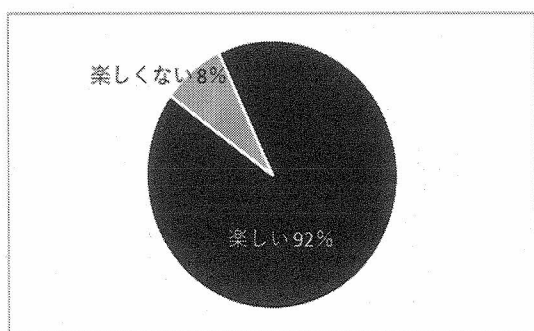


図1 Ⅰタブレットで学習するのは楽しい

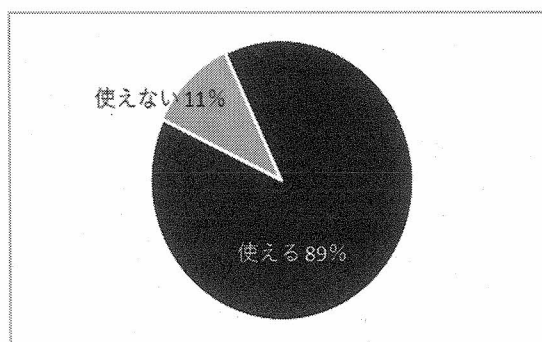


図2 Ⅱインターネットを使うことができる

図1の「Ⅰタブレットで学習するのは楽しい」という質問では両校とも90%前後の子どもたちが楽しく感じていることが分かった。しかし、「楽しい」と答えた割合が80%を唯一切ったB校の4年生20名を対象に「ロイロノートを使つての授業はどう思いますか」という、インタビュー調査を行いネガティブな意見を抜粋すると、「自分の回答がみんなに共有されるのが恥ずかしい」「提出が遅れていることをばれるのが嫌だ」というように、自分の思いや考え

がみんなに見られるのが嫌であることが分かった。ほかに、「約束事が増えて大変」「パソコンを触るのが苦手」といった意見もあった。

図2の「Ⅱインターネットを使うことができるか」という質問でB校は全家庭がインターネットを「使える」といった結果になっていたが、A校は81%の家庭が使えるといった結果になった。もう少し細かくみると6年生の家庭が「使える」といった回答であったが、学年が下がるごとに「使える」の回答率が下がっていき2年生になると60%になっていた。

インタビュー調査で、おうちではスマートフォン以外に調べものすることができるものがあるかをA校の2年生に聞いてみると、ノートパソコンがある家庭が多くそれで調べものをしたことがある子どもが80%いたため、子どもたちの中で自分が見つめるかどうかで考えた子どもがいたのかもしれないため、実際はもう少し使える子どもが多いと思われる。

6-2 コロナウイルスの中での学校生活に不安や不満がある。

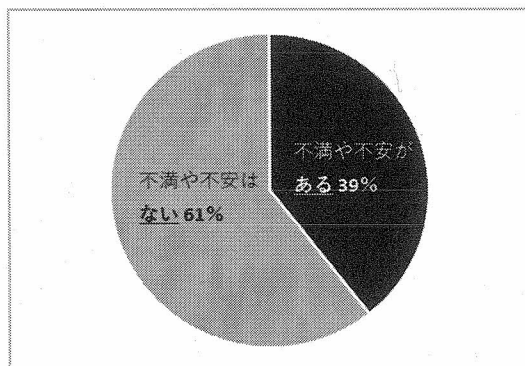


図3 Ⅲコロナ禍の学校生活に不安や不満がある

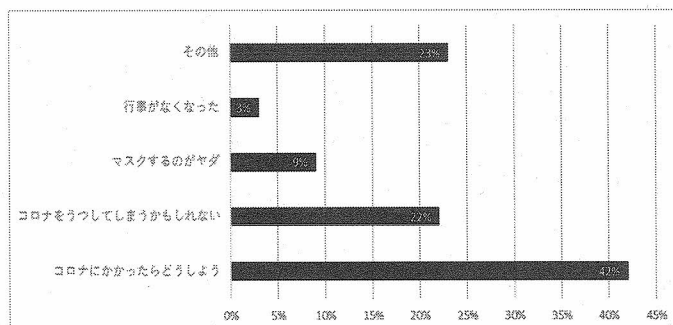


図4 Ⅳ不満や不安の理由

コロナ禍の中での学校生活には不安や不満を持っている子どもは多くこれは両校ともに40%前後の子どもたちが「ある」と回答した。その理由に関しては図4の「Ⅳ不満や不安の理由」に示している。1番多かった「コロナにかかったらどうしよう」という意見の中で特に多かったのが給食を配る際に話している人がいて、それが原因でかかるのが怖いという子どもが多かった。その他の中에서도少しだけ意見を抜粋すると、「授業中に机をくっつけられなくなったのが悲しい」「授業でみんなと意見を交換する時間が減った」このような授業に関係するような意見も見られた。

6-3 学校生活は楽しいですか。

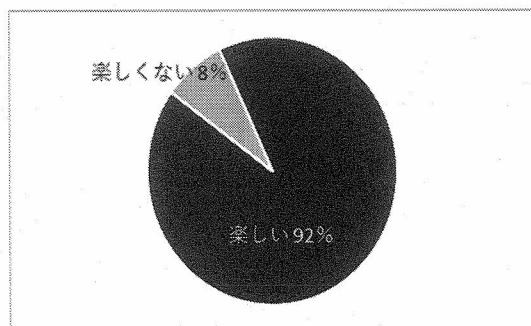


図5 V学校生活は楽しいですか

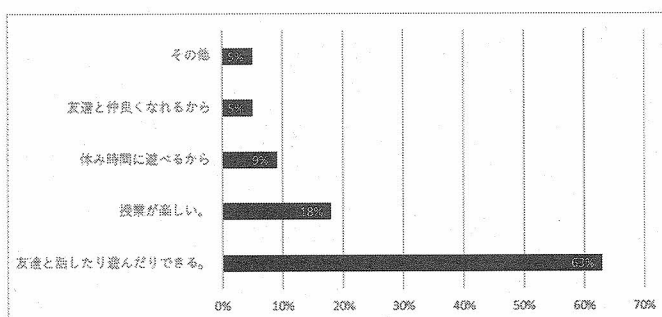


図6 学校生活が楽しい理由

この結果から、コロナ禍ではあるが学校生活自体は楽しく過ごしている子どもが多くその理由は図6の「VI学校生活が楽しい理由」を見るとわかるように半数以上の子どもが友達との関わりが大きな要因としている。その他の意見を抜粋すると、「給食がおいしいから」「先生と話せることが楽しい」「遊具が使えるから」といった意見があり、教員が影響を与えている意見もあった。また、ネガティブな意見では「友達関係がうまくいっていないから」「授業が難しいから」「給食が楽しくないから」があり、ネガティブな意見でも友達関係が特に多い結果になった。

6-4 コロナウイルスの中で運動会がなくなったり給食で喋ったりしてはいけないことをどう思いますか。

2年生3年生であれば「いやだ」「悲しい」といった意見が多かったが、「状況的に仕方がない」といった、受け入れている子どもも少数であるが見られた。しかし、学年が上がるにつれてこの状況を受け入れるしかないと思っている子どもが増えてきてはいたが、6年生は「小学生として最後の行事がなくなっていくのがつらい」と考えている子どもが増えており、全体としては79%の子どもたちがこの変わった状況について、ネガティブな意見を述べていた。また、意見を抜粋すると「行事が楽しみだったのになくなったのは悲しい」「運動会であった家族でお弁当を食べたりすることができなくなって悲しい」「全学年の発表や種目が見られなくなったのはさみしい」などの意見が見られた。逆の肯定的な意見は「コロナにかかる不安が少しでもなくなるならいい」「行事ごとが嫌いなのでラッキーだと思っている」「代わりの行事があったのでそれで満足している」などの意見が見られた。

6-5 去年の休学中に困ったことやよかったこと

B校にしかアンケートを実施することができなかった上、覚えてないといった回答が多かった中142名の回答を見てみると、困ったことについての71%が「学校からだされた課題や勉強についての質問が誰にもできない」となり、その他の意見として「生活リズムがおかしくなってしまった」「友達と話すことができなかった」「家で1人の時間が多くて暇だった」などがあり、よかったこととしての意見は「自分の好きなことをする時間が増えた」「給食で苦手なものを食べずに済んだ」「自分のリズムで勉強することができた」などの意見が見られた。

6-6 コロナウイルスが収まったら何をしたいか。

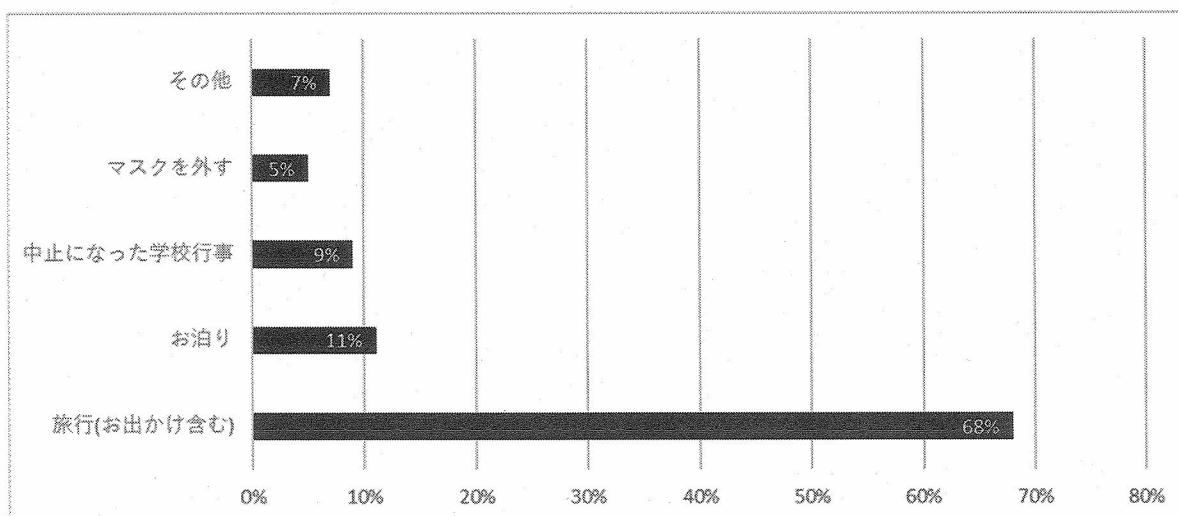


図7 VIコロナウイルスが収まったら何をしたいか

図7の「VIコロナウイルスが収まったら何をしたいか」を見てみると旅行(お出かけ含む)が圧倒的に多くみられた。その中でも家族や友達、1人と指定している子どもも多くみられたが、本アンケートでは区別せずに集計した。その他の意見には「帰省をしたい」「お祭りに行きたい」「パーティーをしたい」などのような意見が見られた。

6-7 インタビュー調査

A校、B校の児童100名に「ZOOMを用いた朝礼についてどう感じるか」「休校中と今でうちでの過ごし方」についての質問を行った。

結果として前者の質問では、81%の子どもたちが「きちんとみんなで集まって朝礼をした」と回答しており、みんなで集まって、朝礼をしたいと思っていることが分かった。また、「教室にいれば暑い日も集中して聞くことができる」というような室内であることのメリットを

答える子どもや、「いちいち外に行く理由がわからない」のような従来のやり方に疑問を感じている子どももいた。

後者については、55%の子どもが「特に変わってないと思う」と回答した。「変わっている」と答えた子どもにさらに深く「何が変わったのか」質問すると、「保護者の用事についていく」が95%もの子どもが回答した。残りの5%は「外出が可能になった」ことに関係する回答であった。

7. 考察と今後の課題

7-1 休校中のGIGAスクール構想と家庭のインターネット環境

図1,2を見ると、コロナ禍で前倒しになったGIGAスクール構想において、タブレット端末を用いた学習について子どもたちの多くは肯定的で学習への意欲へとつながっていた。しかし否定的な子どももおり、その意見として、提出する際やした後、自分の回答や進行速度がクラス全体に伝わってしまうことがあるのを嫌っている子どもが多く見受けられた。しかし、この活動を通すと教員としては評価の取りやすさや、意見交換を話すことを通さずに行うことができるといったことができるのが魅力である。本項目に関してのインタビュー調査を行った学年は授業を担当していることから、否定的な意見を述べている子どもは自己肯定感が低い傾向にあるとみられる子どもたちであった。よって、自分の意見に自信がなければ印などをつけて、意見の良いところを言い合う活動を取り入れると、少し改善されるのではないかと考えられる。

GIGAスクール構想で欠かせなくなるのがインターネットを使える環境が整っているのかである。これは結果でも述べたが、低学年になればなるほどインターネットを使いにくい環境であることはわかった。しかし、自分が自由に使えるかどうかで考えてしまっていることもあると予想し、ほぼ100%の子どもたちが使用可能と仮定する。すると、再度コロナ禍のような状況になった際、インターネットを経由した課題を提示することができたり、保護者のスマートフォンなどからできたりするなど、活用の方法は様々あると考えられる。学年によってはZOOMを用いた授業も可能になると考えられ、そういったことが行えるようになると、6-3や6-5で出てきた友達関係での悩みは改善され、楽しみが増える子どもが多くなると考えられる。授業だけでなく休み時間の間には、顔を見て話し合えたりすることでより、友達との関わりは深めることができるようになると考えられる。

しかし、課題はたくさん予想される。インターネット回線を用いることから、映像や音声が不安定になることももちろん予想される。また、様々なツールを使用することが可能であるため、そういったツールに興味を持ち授業に集中できなかつたり、いじめにつながってしまったりなど、たくさんのリスクが考えられる。そのための対策をどのように行うかは、オンライン授業についての検討をしなければならないため割愛する。

7-2 学校再開後のコロナウイルスの中での学校生活に不安や不満

結果から、マスクをつけることが嫌な子どもたちは、息がしにくいからであることが考えられる。コロナにかかってしまい、自覚症状なく友達や家族にうつしてしまったらどうしようとする子どもが多かった。しかし、これに関しては再度コロナ禍になった際、学校側では対応のしようがないことであるためそれ以外の意見にあった、行事に関する対策について考察する。しかし、全校生徒を集めてするため、全く同じ形式で行うことができないことから代替行事を考えなければならない。ただ、6-4のような結果から代替行事について肯定的な意見も見られた中でも、全校児童が見られるようにしてほしいといった指摘があった。そのためオンラインで行う場合は、従来の行事と同じように1日を使い、全校児童で行えるような代替行事を考えるとよいのではないかと考えられる。

ただし、これは同時に大きな課題となり行事を行うということはそれなりに準備をしないとイケなくなる。では、この準備をどうやって行うのかを考えると、もし自宅待機を行うとなった際、低学年ではかなり現実的ではないことがわかる。そうすると、代替行事は保護者と協力して準備のお願いや、参加しやすい内容ではないといけなことが考えられる。

8. 今後の展望

今回「今後コロナウイルスのような未知のウイルスが蔓延したときの休校中や学校再開後の学校の対応」を考えるために様々な調査や分析を行った。そうした中で分かったこととして、子どもたちはコロナ禍の休校中では学習に関する疑問を解決する方法がないことと、友達との関わりがなくなることが困りごととして明らかになった。しかし、GIGAを用いたオンラインでの課題や授業を通して、このような子どもたちの不満は解決しやすくなるのではないかと考えるが、それには必ずリスクが付きまとうためそのリスクとどう向き合い、対策するのかであるが、ZOOMを用いるならZOOMについての研究をするといった教材研究が大切である。

学校再開後は、コロナ対策については最善を尽くしていると考えている。行事については、代替策として全校児童が集まることはできなくても、参加できるような行事にすると、子どもたちの学習の発表の場になるのではないかと考えられる。

では、今後の展望として学校側の準備としては休校になった際のことを考え、オンライン授業を行うために必要な知識や準備を教員1人1人が協力して行うことがまずは大切であると考え、ツールについての教材研究を進めるとともに、より学校生活に近い状況のままで自宅待機をしながら学習を進めるためにどうするとよいかといったことを少しでも考えておくと思えるのではないかと思います。また、子どもたちについても従来の学校生活に近い環境で生活することが1番のモチベーションになり心のケアにもつながるのではないのかと思うとともに、この取り組みは現在不登校の子どもについての対応へもつながるのではないかと思います。

9. 参考文献

- ・木村 拓也, 木村 円香, 黄 薇, 陣内 未来, 鮑 威(2021): コロナ禍における大学生のオンライン学習状況に関する調査報告(速報):「九州大学教育社会学研究集録」22 巻 p. 45-52
- ・丹内 周子, 辻岡 夏彦, 判 勇雅 (2021): 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に伴う休校期間が高校生の感情に及ぼす影響の一考察-生徒の分析を通して-:「高校教育研究」72 号 p. 19-24
- ・一般財団法人 教育調査研究所(2021): コロナ禍が子供や学校に与えた影響と対応: コロナ禍における子どもの変化と学校経営の改善 第三章 p13-23